

GO TO 世界の旅

フランス在住の絵本作家、市川里美さん。市川さんの優しくあたたかな絵本は、世代を問わず人気です。そんな市川さんの作品のいちばんの特徴は、未知の世界への好奇心、異文化に対する敬意が伝わってくるのではないのでしょうか。

絵本をつくるとき、市川さんはまず、物語の舞台となる地へおもむき、そこに滞在してスケッチを重ねます。カメラを持っていくことは、ないのだそうです。そうして現地の人たちとふれあうなかで、表現したいものを探していくのです。

コロナ禍のなか、わたしたちは世界を自由に行き来することができなくなりました。こんな時だからこそ、市川さんの絵本を読んで、世界を旅しませんか？そして、見知らぬ土地とそこで生きる人々に思いをはせていただければと思います。



「世界の旅から生まれた絵本～市川里美の世界～」

生まれ故郷大垣をあとにして、一人でヨーロッパに旅立ったのは21歳の時。それからパリに住んで長い歳月が流れてしまいました。パリの本屋で偶然であった美しい絵本に刺激され、美術を学んだこともないのに自分で絵本創作の仕事を始め、これまで夢中で描いてきました。振り返ってみると絵本の数は80冊ほどになっていました。現在まで一度も断絶することなく長い期間この仕事を続けてこられたのも、出版社の理解、国内外の読者の方々、応援して下さる故郷の人たち、また人生の旅先で出会った人たち

のおかげと、感謝の気持ちでいっぱいです。いつのときも創作のテーマは、人生のその時々に出会った人びと、生活、自然、動物、花などと常に愛したものだといえます。日常生活の中であったり、あるいは遠い国に旅しながらそこで思いがけない違った生活をする人びとに出会うとき、その違いゆえに、私を驚かせ、世界は限りなく広く、豊かなものであり、生きとし生きるものは愛しいものだと感じられるのです。そこでしばらく一緒に暮らした人びとのこと、また路上で出会って言葉をかわしたただけの子供であっても、心に残ったことは絵本のなかに留めておきたいと思ったものです。それゆえに、これまで創作してきた絵本は私の歩んできた人生の記録といえるかもしれません。これからも、日常生活の中で、あるいは遠い世界の国に旅しながら出会った愛する世界を絵本のなかに描き続けていきたいと願っています。



『ジブリルのくるま』に登場するおもちゃのくるま

2018年 市川里美

世界のこどもたち

絵本『カイマンのダンス』—アマゾン川のほとりに住む人たちを訪ねて—

ハンモック船に乗って

2019年の夏はアマゾン川を訪れた。ペルーのアマゾン地帯の主都イキトスあたりで、支流が合流しアマゾン川が生まれる。その後ブラジルを通り2700km先、大西洋に流れ出ていく。このイキトスへは、道路が無いので、飛行機か船しか行くべきがない。私は迷わずブカルパから6日間の貨物船の旅を選んだ。すべての生活用品は貨物船で運ばれる。船底はブルドーザーから洗濯機、トイレの紙、ビール、卵、生きた鶏まで、ありとあらゆる物がぎっしり積まれている。上の階も乗客でいっぱい。貨物船で旅するような地元のペルー人は気さくで親切、とても人情深い。みんなとひとつの大部屋にハンモックで寝て、まさに「同じ釜のメシを食い」、家族のように過ごした6日間は一生忘れることができない。



アマゾンが舞台の絵本『カイマンのダンス』



ハンモック船のスケッチ



カイマンのスケッチ

いカイマンがのっている。「けさ、おとうさんがつかまえてきたの。今日の昼食よ」と言う。カイマンってここでは日常生活の中にいるものなんだ！自然の中で暮らす人たちは、地球が始まって以来、自然が与えてくれるもので、すべてまかなって生きてきた。それで問題なく自然のバランスが保たれてきたのだ。こちらでは家族が生きていくために捕まえるくらいは許されているらしい。アマゾンは暑く湿気が多い。だれもが毎日1、2回は川に水浴びにおりて

カイマンと出会う

イキトスに着いてからは、毎日、動物保護センターにスケッチに通った。人間が自然を破壊したために、数少なくなった動物たちがここに保護されている。いるいる！ヒョウ、魚、サル、ヘビ、鳥など。アマゾンに住むワニはカイマンと呼ばれることも、そこで初めて知った。赤ちゃんカイマンもたくさんいる。市場で売られているところを、おまわりさんに助けられてここに連れて来られたのだろうか。まだ小さいのに、恐ろしい目にあってかわいそう。でも、ここではもう心配は無用だ。背に太陽の陽を浴びてウトウトするもの、のん気そうにぼっかり水に浮かんでいるものなど。目がパッチリしてかわいい。カイマンなんて自然の中で出会うことなど、まずないにちがいない。ここでスケッチできるのは好都合と、せっせと毎日鉛筆を走らせる。

自然とともに暮らす人びと

さて、川やジャングルに住む人たちの生活も見たいと、またブラジル方面に向かう貨物船に乗りこんで途中下船、小さい部落まで行き、そこで暮らす家族に迎えられた。ふと、そのの台所をのぞくと、なんとまな板の上に小さい



イモをすりおろしているお母さんのスケッチ



アマゾン川でとれた魚のスケッチ

行く。子どもたちは川辺に着くやいなや、バシャーンと勢い良く水に飛びこんでいく。同じ川には、ヘビもカイマンも、そのほかたくさんの生きものが住んでいるというのに…。よそ者の私は、おそろおそろ岸辺で水浴びをする。人間と動物たちがそれぞれに同じ川で共存するには、お互いの領域というものがある、皆それを了解しているのだろう。動物たちはかしく生きるすべを知っている。カイマンたちの世界にも、親から子に伝えられる知恵でもあるのだろうか？危険をのがれるには、どうするの…？アマゾン川のほとりで過ごした日々を思い出しながら、いろいろ空想を重ねているうち『カイマンのダンス』の絵本ができた。

2021年 市川里美